

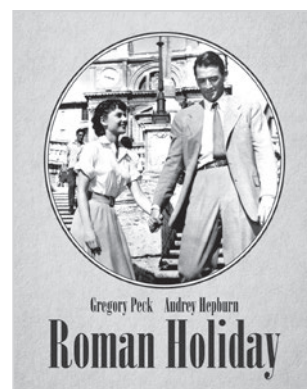
『ローマの休日』

1953年／アメリカ／ウィリアム・ワイラー監督作品

「ローマの休日」と 「トランボ ハリウッドに最も嫌われた男」

会員 末次 弘明 (48 期)

ローマの休日
4K Ultra HD+ ブルーレイ:
6,589 円 (税込)
発売元: NBC ユニバーサル・
エンターテインメント
©1953, 2023 Paramount
Pictures.
※商品情報は記事公開時点
のものです。最新の内容をご
確認ください。



「ローマの休日」を最初に観たのは中学の時だった(親世代の映画なのでテレビで観た)。その時は、オーディリー・ヘップバーンの美しさに心を奪われ、恋愛が成就しない切なさを感じた。映画の最後、グレゴリー・ペックが去って行く際、宮殿内にコツコツと鳴り響く靴の音が今でも耳に残っている。2回目に観たのは大学生の時だった。その時は、隠し撮りをした全ての写真をアン王女に渡し、良き思い出として記憶に止め公表しないという選択、思いやりと相互の信頼感に心打たれた。3回目は弁護士になって間もなくだった。その時は、王位承継者としての地位にうんざりして逃げだしたアン王女が、「ローマの休日」を経て、社会における自らの役割を自覚し、王位承継者として生きていく覚悟を示した姿に清々しさを感じた。人生の節目節目で観る機会があった作品で、観る度に感じ方が変わっていった作品である。この映画のクレジットには脚本家として、イアン・マクレラン・ハンターの名がある。

さて、「トランボ ハリウッドに最も嫌われた男」である。この映画は、ダルトン・トランボという脚本家の実話に基づくドラマである。トランボは、第二次世界大戦中アメリカ共産党に入党していたため、戦後のマッカーシズム(赤狩り)の対象とされ、議会に呼び出される。「共産党員か」というヒステリックな問いに対し、アメリカ合衆国憲法修正一条(議会は言論の自由を制限する法律を作ってはいけないという原則)を理由に証言を拒否したところ議会侮辱罪で収監されてしまう。トランボは、「ブラックリスト」に

載ってしまい、仕事ができなくなっていく。そのような中、トランボは1つの脚本を書き上げ、友人の「イアン・マクレラン・ハンター」に渡し、ハンターが脚本の名義と報酬の一部を得ることを提案する。その脚本が『ローマの休日』であった。トランボは、偽名を使って様々な脚本を書くようになり、偽名で書いた「黒い牡牛」がアカデミー賞を受賞するが、授賞式には出席できない。その後「スパルタカス」や「栄光への脱出」など大作の依頼が舞い込み、家族の支えもあって復権する。この映画では、ハリウッドにおける「赤狩り」の様子、その旋風の中で翻弄される個々人の姿が映し出されている。社会の雰囲気という大きな波に飲み込まれ、善意からかもしれないがその「赤狩り」の先頭に立ってしまう有名俳優達、その波に当初は抗うものの生活のために仲間を裏切らざるを得なくなってしまう者、抗ったために仕事を失い収監される者。社会の雰囲気が暴力となり個人を血祭りにあげる怖さを感じる。

「ローマの休日」は、トランボが仕事を失い、失意のまっただ中にいるときに生まれた作品だったのである。人を思いやる心と相手を信頼しそれに応えることの尊さ、社会の中で役割を果たすことの大切さを描いたあのような作品が、仲間裏切られ、精神的にも経済的にも追い込まれていく中で生まれてきたことに感動する。「トランボ ハリウッドに最も嫌われた男」を観た後は、「ローマの休日」は、私の中では、泥の中に根を張り美しい花を咲かせる「蓮の花」のような作品、という印象に変わっている。